

「もとはこちら」のお話し

№40 今月のテーマ 遠くの神様 ありがたい

2010 年（平成 22 年）4 月 17 日（土）



自分から
自分で自分を
説教できるようになれば
しめたもの

内なる良心の声に耳傾けよ。神は常に呼びかけ続けて続けて下さっ

（平井謙次作 日めくりカレンダー 30 日の言葉）

ひよんな事から、今をときめくあるミュージシャンと親しくお話をさせて頂く機会がありました。多くのファンに支えられて、全国各地でライブを開いて約二十年。男性二人のデュオだったのが、このたび新たに女性ボーカルも加わり、八枚目のアルバムも出たとのことでした。今は幾つかのラジオやテレビの番組を任されており、ディスクジョッキーというのでしょうか、音楽やお喋りを中心にした楽しい番組を幾つも掛け持ちでやっており、大活躍のようです。

実はうちに来られたその日も、朝七時から午後一時までの時間ぶっ通しであるラジオに出ており、喋り、CDをかけ、奮闘してきたとの事でした。放送終了後すぐにこちらに向かわれ、支援者と名乗る人と共に私どもの所に着いたのは、確か二時半頃だったと思います。しかし彼はお昼ご飯抜きの空腹感や疲れなどは微塵も感じさせず、初対面の挨拶を交わすなり、まるで番組の続きの様な感じで、大きな声で喋り、笑い、楽しく語り続けました。プロとしての誇りと自信に裏打ちされた話は誠に面白く、そしてまた時折り交える業界の裏話なども、なかなか興味深いものがありました。意気投合し、ほうほうと頷き笑っているうちに、ふと気がつけば窓の外はもうすっかり暗くなっており、びっくりさせられました。その時初めて知ったのですが、よく耳にするあのコマーシャルソングも、彼の手によるものとの事、そういえばあの歌声は、まさしく今耳にしているこの声でした。

地元の評価

そんな彼が熱く語ったことが一つありました。あるCDを七万枚売り上げ、東京でのコンサートで盛り上がった後、「ぜひ今度は和歌山で」と依頼してきた人がいたそうです。聞けば相手は和歌山の人。それで、実は自分達も和歌山出身だといったところ、とたんに相手は失望の色を表し、ナンダという顔をしたのだそうです。そしてあからさまな態度で、規定の出演料を値切ってきたというのです。「なんでや?」と彼は言います。



北原ゆり 筆

東京などの大都市圏で活躍していると、ただそれだけの事で高い評価を下し、それが地元出身だと知ったとたんに、なぜか「値打ちのない、しょうも無いヤツ」扱いになる、こういう事がとても多いというのです。

音楽そのものを自分の感性や感覚で評価するのではなく、活動している場所とか、CDが売れているとかみんなが騒いでいるという様なところで判断し、そして片方では「地元出身の人間なんかは、ロクなのがいるはずがない」といつて見下すような人が結構いるのだと言って、とても残念がっております。

音楽に限らず、何事においても地元で評価されるというのは、なかなか大変なようです。そういえば、学校の先生が、先生として赴任する時には、できるだけ生まれ育った地元は避けるようにすると聞いたことがあります。

先生としてのキャリアや実力をいかに身に付けたとしても、その先生の子供時代を知る地元の人達が、「あの先生、今はアンナンだけど、実は子供の頃は相当のワルやったんや」等とそつと陰口を利いたり、子供達に面白おかしく言っけて聞かせたりするので、どうにもやりにくいと言います。

「遠くの神さんありがたい」とは、平井先生もよく笑いをこめて言われておりました。

近くに立派な神さんがある（いる？）のに、わざわざ時間とお金をかけて、遠くにお参りに行く人が多いというのです。旅行がてらの道中の楽しさという事もあるでしょうが、やはり遠ければ遠いほど何かありがたさが増し、ご利益も多いような気がするという事でしょうか。

遠くにあるものは憧れの対象となりえますが、近くのもの、なかなかそうはなりません。

ですからどんな人でも家族に尊敬されるようになったら、たいしたものだと思います。いつも一緒にいる遠慮のない家族の前では、誰でも素の自分をさらけ出して生きていますから、家族から尊敬されるという事は、並みや大抵の事ではないはずです。それも極々平

凡なもの同士ですら、お互いを理解し合うというのはなかなか大変な事なのです。ましてや相手が非凡な才能の持ち主ともなれば、その考え方や価値観、日常の行動様式なども私達とは全然違うでしょうから、本人も周囲の人もお互い苦労する事が多いようです。

先のミュージシャンも、音楽上の自分の信念を押し通したために、スポンサーと対立する結果となり、その事が引き金となって、殆どの仕事から外されてしまうという憂き目にあった事があるそうです。しかし彼は慌てず騒がず、自らの信念を曲げずに、これまで通りの生き方を貫いたそうです。普通の人の損得勘定ではありえない潔い選択をしたその結果、彼の家族もまた仲間たちも大変な窮乏生活を強いられて、その時は色々ご苦労をされたとの事でした。

生きているうちに死ぬ

先程も言いましたが、私達はなぜか「遠くの神様ありがたい。近くの神様、たいした事ない」と思うようなところがあります。

神様に対してさえそうなのですから、ましてや相手が人間の場合には、それが身近な人であればあるほど、正しく評価するのはなかなか難しいという事になります。その為でしょうか、「女房の焼くほど亭主、もてもせず」という川柳を地で行くような、微笑ましいおしどり夫婦の中にはありますが、どちらかといえば、互いの欠点ばかりをあげつらい、角つき合わせて愚痴や不満、不平などをぶつけあうような夫婦が結構いるように思います。

結婚最初は「あばたもえくぼ」だったものが、いつの間にか「えくぼもあばた」状態になってしまふ様です。この、近いものほど欠点が目立つという事は、人間に限った話ではありません。

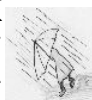
あのクレーターだらけのお月様でも、遠くにあれば煌々と輝いて見えますし、近くの山よりも遠くにある山々は、もっともつと美しく見えるものです。「山のあなたの空遠く、幸い住むと人のいう」と詩人カールブッセ（上田敏 訳）がうたった様に、私達は、どこか遠くには素晴らしい所があり、そこに行けば幸せになれるというよ



うな思いを抱きがちです。

それで、「われ人と、とめ行きて」、即ち遠くに幸せを探しに行つて、しかし求めるそれは見つからず、その結果「涙さしぐみ、歸り来ぬ」という事になります。

それでもまだなお諦めきれず、幻想を追つて、「山のあなたのなお遠く、幸い住むと人のいう」という事で、もっともっと遠くに幸せを求めようとする事になるのです。



この思いの行き着くところが、あの天国や極楽などの存在ではないでしょうか。

十万億土もの彼方には、いまだ見た事も無い素晴らしい浄土、即ち最高に素晴らしい所があり、生前の善行によつて私達は仏に導かれ、死後はそこで幸せに暮らせるという話です。

今がどれほど苦しくても、仏の道にかなつた善い生き方さえしていれば、将来は必ず幸せになれるのだという話を信じる事によつて、多くの人が厳しい現実を強く生きる心の支えとしてきたのです。

しかし煎じ詰めれば、これもやはり「遠くの神様ありがたい」の範疇はんちゆうの話ではないでしょうか。

平井先生はいつも「生きているうちに、死ぬ」と仰っていました。それはこの貴重な人生を、この世的・世俗的な幸せのみを追い求め右往左往するだけで終わらせてはならない。生きている今のうちに、しっかりと生死を越えよという事です。

肉体の生死を超越して生き続けている本来の自分、完全無欠な自分というものにはつきりと出会つて、いまここで本当の幸せ者になれるという事です。

考えてみれば確かに私達は、あるかどうか分からない死後の幸せよりも、現実に生きている今の幸せがほしいというのが、偽らざる本音なのではないでしょうか。

生きている現実の苦しみから救われ、人間として得られる最高の喜びや、安心立命の境地を捜し求める私達凡夫に対し、江戸時代の高僧白隠さんは、「衆生近くを知らずして、遠くに求めるはかなさよ」

と座禅和讃の中でもいわれました。

幸せは遠くにもあり、近くにもある。生きている時は生きているその中にあり、死んだ時は死んだ中にある。自分の一挙手一投足の中に神仏はいるのだと言われているのです。

たとえば私達はいつとも空気を吸いながら生きています。しかし余程の事が無い限り、その事を私達は意識することなく当たり前のようになんか生きています。そのように、私達は誰でもその身そのままの状態で、いつも絶対の幸せというものに丸ごと包み込まれておりながら、その事に気がつかないというのです。

そしてどこかに幸せは無いだろうか、どこかに自分を救ってくれる神仏がいまいだらうかと、遠くばかりを探し回っているその愚かさを、白隠さんも平井先生も憐れみ、もっと近くに求めなさいと言われているのです。



もう一人の自分

近い人といえ、家族や友人や仲間たちです。しかしその人達よりももっと近くにおいて、しかも自分といつも一緒にいる人がいます。自問自答ということがありますが、すべての人の中には、神そのものの本質を持った、もう一人の尊い自分があるのです。

それと同時に、肉体のAさん、Bさん、Cさん達すべての人の中にも、私の中にいるのと全く同じ、そのもう一人の自分があります。

その事に気付く事ができれば、気付いたその瞬間に、相手という対象物がなくなります。全ての中に自分がいて、自分の中に全てがあるという事を、理屈ではなく感性感覚が教えてくれるのです。

この、内にも外にも、近くにも遠くにも、場所や時間を超えて存在する神仏の働きは、必要に応じて様々な形となって現れます。

幼子に対する優しい母親のように慈愛に満ち、温かく包み込みながら私達を育て下さる場合もあれば、あえて厳しい環境を与え、叱咤激励しながら突き放す、父親のような厳しさの中で磨いて下さ

る場合もあります。

また同じ厳しさとひと口に言っても、それは二種類あります。

それまでの生き方の間違いに気付かせる為に壁を設け、苦境に立たせる場合と、もう一つは、更なる発展・更なる幸福の為に、あえて困難を与える場合です。眠っている新たな力を目覚めさせ、引き出す為にです。

自分を取り巻く周囲の人々とは、ある時は光となり、またある時は厳しい試練の陰となるそういう神仏の化身です。

化身となる前の神仏そのものは、完全無欠であるが為に、それ自体を目に見える姿形として現わす事は絶対にありません。

しかしそれは神の子の姿として、いつも全ての中に現れ続けているのです。

経験する事や相手の中に、現れ続けているこの尊い神仏の働きを見出せるかどうかは、あくまでも私達一人ひとりの力量にかかっております。

ですから、この目には見えない神仏の存在をはっきりと見出さんが為に、古来より多くの人が命を削るような厳しい修行に耐えてきたのです。

敵を味方に変える生き方

帰り際に彼は手持ちのCDをプレゼントしてくれました。お勧めは全力投球というタイトルのCDの中に収められている「道」という歌だそうです。

「自分がここまで歩いてきた道は、決して一人で歩いてきたのではない。本当に沢山の人の支えに助けられて、ここまで来ることが出来たのだ」という、感謝に満ちた歌です。

そしてまた別の歌の中で、「明日の希望という名のグローブに向けて、自分はいま全力投球をする」と歌っています。

当時対立し、彼をすべての仕事から外したその当人が、今はなんと強力な支援者の一人となって彼を起用し、色々な仕事を任せてくれているという事でした。

何があっても相手を憎まず、恨まず、全てを善意に受け取ってい



く彼の純粋な生き方が、どうやらかつての敵をも味方に変えてしまったようでした。

どんな苦境に立った時も、決して相手を変えようとする必要はありません。

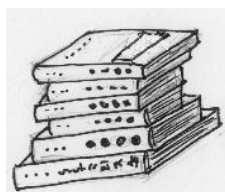
自分の中にいるもう一人の自分の心に静かに聞いてみて、これからやろうとしている事・したい事が、自分の物欲や名誉欲などの損得勘定から出たものではなく、それが神にも通じる純粋な思いから出たものであるならば、迷うことなく自らの信念を貫くことです。

そうすればその意、自ずと相手に通じます。なぜならば、自分の中に宿る神と相手の中に宿る神は、全く同一のものだからです。

接する全ての人の中に神仏の存在を見出せる自分になるためには、まずは自分が、自分の中に存在する神仏に気付くことです。

そして全ては、もとはこちらの法則によって起こって来るといいう固い信念を持ち、努力と感謝心を忘れないことです。

即ち、徹底して物事を善意に受け取る訓練をする事で、悪魔は仏に、地獄は天国に変わるのです。変えて行くのは自分です。



編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com